

幼児期の人とかかわる力と保育—インフォーマル集団の育ちに着目して

竹 石 聖 子

はじめに

以下は、放課後の外で遊んでいる子どもたちの様子である¹。

エピソード①

近所の子どもたちが自然と駐車場に集まってくる。下は4歳、上は12歳で、男の子は4人、女の子は5人。この9名の集団を引っ張るのは12歳の女子である。女子はみんなに何をするか聞くと、「鬼ごっこ」「ドッチボール」「お人形さんごっこ」と千差万別の答えが返ってくる。すると一番年上の女子が「お人形さんごっこは男の子たちが、遊び方がわからないからだめね。ドッチボールは小さい子がいるから難しいなあ。鬼ごっこにしよう」とみんなの意見をまとめ、「鬼ごっこ」がはじまった。

鬼ごっこがはじまると、一番小さい女兒はすぐに鬼になってしまうものの、捕まって飽きちゃうとふらふらしはじめる。でもそれを誰もとがめることなく、女兒の好きなようにさせている。

「鬼ごっこ」が停滞すると、一番年上の女子がルールを変えていく。そのルールに異論があると別の男子が代案を提案する。

少子化が叫ばれ、子どもが外で元気に走り回る姿をみることが少なくなった昨今であるが、上述した子どもたちの遊びは、子どもが群れて遊んでいた頃を懐かしく感じる光景である。一方でこんな光景も目にする。

4歳の女子の家に小学校1年生と2年生の女子が遊びにきたときの光景である。

エピソード②

お友達が遊びにきてくれて4歳の女兒はうれしそうにしている。みんなで楽しく遊びたくて家にある自分のおもちゃを次々と出してきた。それぞれが自分の好きなおもちゃで一人遊びをはじめた。

別の日には次のような光景が見られた。

エピソード③

4歳の女兒が持っているマグネットの着せ替え遊びをすることになった。好きな人形（おねえさん、おとうさん、おかあさんなど）を選び、「ここはおとうさんの部屋。お父さんの部屋にはテーブルを置こう」と良いながら、マグネットを使ったごっこ遊びがはじまった。

しかし、4歳の女兒は自分のおもちゃを皆で仲良く遊ぶことが難しく、独り占めしようと

する。すると他の女子が「一人で使ったら遊びにならないよ。わがまま！」と言い争いになってしまった。強い口調で責められた4歳の女児はうずくまり泣いてしまった。他の女子は何事もなかったかのように遊び始めた。その間4歳の女児はずっとうずくまっていた。

エピソード①は、最年長の女子をリーダーとした子ども同士の関係性が気付けており、集団遊びが成立していた。エピソード①が興味深いのはその集団が、「クラス」等のように大人に決められたフォーマルな集団ではなく、地域に自然発生的に生じたインフォーマルな集団であることだろう。またその集団も異年齢で構成されており、小さい子どもも遊べるような配慮が子どもなりになされていた。そのエピソードと比べるとエピソード②と③は異年齢ではあるが年齢が近く、女子だけの関係である。小学校就学前の4歳女児と小学校就学している女子との間で断絶があり、言い争いになったときに、それを解決し再びみんなで遊ぼうという姿をみることはできなかった。

エピソード②③はエピソード①と同じようにインフォーマルな集団である。にもかかわらず、遊びが成立しているか、していないか、という点において大きな違いが見られた。

現代社会を表すキーワードとして、少子化、情報化、消費社会などがあげられる。子どもは本来群れのなかで育つことを前提にしたとき、この少子化、情報化、消費社会という言葉で特徴づけられる社会は、子どもの発達にとっていえば決して好ましい状況とはいえない。

次章で現代社会を取り巻く状況の子どもの育ちについてみていくことにしよう。

第1章 子どもの育ちを阻む状況

まず、少子化について考えてみよう。昔は子どもの元気な声が聞こえるのは日常であった。きょうだいも4人5人が平均的だったのにたいして近年では1人2人が平均となっている。そしてこれはますます減少していることもよく言われていることである²。エピソード①のような子ども集団が地域のあちらこちらにみられたのに比べて、現在では珍しい風景となっている。子どもは群れをなし、子どもが子どもを世話しあうなかで、人としての育ちが促されていたことを思えば、少子化のなかで子ども同士の育ちあいをどのように生み出していくかは今日の課題となっている。

次に、情報化について考えてみよう。私たちの周りには多くの情報で溢れている。それは時には便利で役立つ情報である一方で、どの情報を信じたらよいのか混乱をもたらすものでもある。情報をもたらすメディア（媒体）もこの20年間で多様なものがでてきている。子どもにとってのメディアに注目してみれば、まずテレビが身近であろう。テレビができてから随分と歴史があるが、子どもの見る番組に注目する時、アニメ番組も増えている。また子どもも大人も一緒に楽しむ番組が増加している。かつてはメディアには大人と子どもを断絶する（区別する）機能が働いていた。しかし現在はその断絶はなくなりつつある。このことは親子関係及び子どもの育ちに大きな影響を及ぼしている。

親子関係について考えていくことにしよう。一般にかつては大人と子どもの境界ははっきりしていた。知識をもつ大人、文字の読めるおとな、知識のない子ども、文字の読めない子どもという構図で描くことが可能であった。このことによって子どもにとっては大人はかなわないもの、絶対的な権威をもつ人として存在することができた。しかし先に述べたように、

テレビ番組も「テレビのチャンネル権を持つのはお父さん」だったのが、今や子どもと大人と一緒に楽しむというふうに関係が変化している。さらにインターネットの普及やスマホの普及によって、子どもの方がその扱いにたけていて、情報収集能力がある場合もでてきている。このような状況を前にした時、大人と子どもの関係はもしかしたら逆転しているのかもしれない。情報をもつ子どもと情報から阻害される大人というふうに。そうした関係の逆転は自ずと親子関係においても変化をもたらす。

また便利なスマホは子ども用のアプリも開発され、乳児と親との関係に媒介する必需品になりつつある。スマホをみながら母乳をあげる母親が問題になったり、スマホを子どもに与えてほたらかしにし、自分の好きなことに没頭する母親の問題も話題になることが増えて来た。情報化社会は私たちにとって便利さをもたらした一方で、親子の関係や子育て文化を大きく変容させているといえるだろう。

次に消費社会と子どもの育ちについて考えていくことにしよう。農業中心の社会だった時代には家で食べ物を作り、収穫した農作物を売ることによって現金収入を得るといったぐあいに、家のなかでの生産活動を中心に生活がなりたっていた。子どもも忙しい時は農作業を手伝い、小さいきょうだいの子守りをするなど、家族の生産を支える担い手だったといえる。それに対して現代社会は消費活動が中心の社会といわれる。第一次産業から第三次産業への移行にともない、多くの人々は家の外の会社に雇われ労働力を対価とし現金収入を得る。得た収入で必要なものを買う（消費）するという生活スタイルに変化している³。

さらにテレビアニメの発展により関連グッズがおもちゃ会社によって開発されている。最近ではテレビアニメが始まる前にグッズが販売されるなどグッズ販売とテレビ番組はますますタイアップしている。消費の対象は近年では大人というよりむしろ子どもがターゲットになってきているといえよう。おもちゃがなくても外で自然物を使って遊んだり、一日中虫を追いかけて回している子どもの姿と比べ今日の子どもの遊びは回転の速いおもちゃに遊ばれているかのようである。

以上の社会状況の下で生きている子どもたちは、おのずと外遊びより家遊び、集団遊びより一人遊びへと変化してきている。こうした子どもを取り巻く環境は子ども同士で遊ぶ機会を奪い、そこで培われるであろう「人とかかわる力」が育つ契機を失っているといえよう。

しかし本来人間はモノを使うだけでなく、モノを生活の中で生産することが動物にはない特徴である。また人は一人で生きていくことはできず、社会のなかで社会性をもって生きていく生き物である。そのことを前提として子どもの育ちをみていくときに、乳幼児期の時代に、モノを作りだす力、モノを工夫する力や人と関わり、ぶつかり合いながら社会性を身につけていくことが重要であることはいうまでもない。

第2章 園という場所

前章までに述べてきたように、少子化、情報化、消費社会という言葉で特徴づけられる現代社会は、子どもが「人とかかわる力」を育むには決してよい環境とはいえない。第1章でみたエピソード③からも現代の子どもたちに「人とかかわる力」の弱さが見え隠れしている。エピソード③で紹介した子どもたちはエピソード①では小学校6年生にお姉さんの存在があることで豊かに遊ぶことが出来ていた。そのことを踏まえれば、「人とかかわる力」は個人

の持つ能力というよりは「人とかかわる」経験をいかに豊かにもっているかという課題であろう。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説によると（１）乳幼児期の生活①生活の場において次のような記述がある。「多くの園児にとって園生活は、家庭から離れて主に同年代の園児と日々一緒に過ごす集団生活である。幼保連携型認定こども園においては、保育教諭等や他の園児と生活を友にしながら園児一人一人の世界から徐々に他者と感動を共有し、イメージを伝え合うなど互いに影響を及ぼし合い、興味や関心の幅を広げ、言葉を獲得し、表現する喜びを味わう」。

子ども園に限らず保育所も幼稚園も家族のもとを一定時間離れて同年代の子どもが集団で生活する場所が園という場所である。

人とかかわり力の育ちに注目するなら、保育所も幼稚園も子ども園も、「人とのかかわりに関する領域『人間関係』」についての記述が要領にはある。おおよそまとめると次のような内容になっている。まずは保育者や友だちとかわる喜びを味わうこと。そして自分のできることは自分でい、行動すること。自分のできることをしつつ友だちとともに遊んだり生活することを楽しむことが述べられている。またその中で「共通の目的を見だし、工夫したり、協力したり」を遊びや生活を通して行うこととしている。

これらは家庭生活だけでは育てることができない。園のように親以外の他者、保育者は子どもなど異年齢がいる集団生活を行うことが重要である。

それでは子どもたちは幼稚園や保育園でどのように集団生活を営んでいるのだろうか。

ここでは結城（1998）によるエスノグラフィーから幼稚園での子どもたちの生活をみていくことにしよう。

次の引用は入園式の朝、担任の先生が子どもたちに呼びかけた言葉である。

「たなかりょうたくん、おはようございます。きょうから、ちゅうりっぶぐみさんですよ。さあ、あかいなふだをつけてあげましょうね……。ほら。あかいゾウさん！かわいいわ！さあ、なかにはいってちゅうりっぶのおともだちといっしょにあそんでらっしゃい」

さらに年中のうめ組、年長のきく組も同じように名札をつけてもらう。

「ピンクになれてよかったね。これからも、げんきでがんばりましょう。」

「かなちゃんは、今日からきくぐみさん。去年、とってもよくがんばってくれたから。今日からみどりの名札になるのよ。」

園によって新年度のスタートに仕方は異なっているとおもわれるが、ここで結城により描かれている様子は比較的よくみられる光景だろう。結城によればこれは園では子どもを個々に扱うのではなく〇〇組という具合に集団で扱うことが表れているという。入園したての子どもたちがすぐさま「クラス」に自分をアイデンティファイすることは考えられない。しかし日々の生活を通して自分は「〇〇組の一員」という自覚をもっていく。

こうした幼稚園の様子を昔、外国の研究者が見学し集団行動の出来る園児に感動したという話がある。外国では見られない優れた教育として紹介されたという。このことから集

団をつくる教育的技術が諸外国に比べると日本は高く、それが日本の教育の特徴とされていた時期もあった。

菊池（2005）は集団をフォーマル集団とインフォーマル集団と区別している。それによればフォーマル集団とは「幼稚園を含む『学校』という教育システムにおいて、子どもが最初に属することになるのが、形式的・没人格的であるフォーマル集団で」ありそれは「自分の動機とは関係なく、年齢、居住区などによってある枠組にはめこまれる形で『集団』になるものであり、最初から『集団』の構成員であるという意識は」乏しいとする。しかし、保育者の指導により徐々に集団の構成員であることを意識していくと思われる。一方インフォーマル集団とは「子どもたちの間で自発的に発生する私的関係からなるものであり、自主的な活動に基づくもの」だという。さらに菊池によれば「これまでの社会学研究では、フォーマル集団のもとにインフォーマル集団が発生することによって、フォーマル集団がただの強制的な枠組みではなく、『集団』の構成員がその中で『社会的アイデンティティ』を確率することができるようになる」といわれてきたという。

このことを踏まえた上で園での一日の流れを確認してみよう。

まず子どもたちは随時登園し自由に遊んでいる。この時間帯はどちらかといえばインフォーマルな集団での活動といえる。クラスの枠組みを超えて子どもたちは思い思いに自分の好きなことを発揮し遊ぶ時間帯である。10時頃に子どもたちは片付けをし自分のクラスの保育室へ入っていく。いわゆる「朝の会」「朝の集い」が始められる。この時間帯は「自分の動機とは関係なく、年齢、居住区などによってある枠組にはめこまれる形で『集団』」、つまりフォーマルな集団での活動になる。出席をとったり、当番の子どもたちによる活動のあと、歌をうたったり、絵本の読み聞かせなどが行われる。その後も基本的には帰る時間真での間、クラス、つまりフォーマルな集団での活動が行われる。

改めて園での一日をみってみると家族と離れてそのほとんどの時間をフォーマルな集団で活動しているのがわかる。このいわば日本的な「優秀さ」がこれまで幼児期から小学校への接続をうまく生み出していたといえる。

しかし、1990年代頃から小学校1年生の学級が成り立たない学級崩壊の問題や、小1プロブレムといった新しい問題がでてきた。この解決方法として幼児教育が注目されたり、小学校の準備教育を行うような園も実際に存在している。特に後者はフォーマルな集団の強化といえよう。

これに対し菊池は現代の問題をフォーマルな集団がインフォーマルな集団が再構成されないという問題としてとらえようとしている。クラスの子ども集団を観察しているとフォーマルな活動には実はインフォーマルな集団が支えていることも多い。例えば班というフォーマルな集団を作る際に、保育者はインフォーマルな仲間関係を考慮したりすることがあるのではないだろうか。筆者がかつて観察した保育園の子ども集団もいくつかのインフォーマルな集団が重なりあってフォーマルな集団として成り立っている様子がみてとれた。

しかしながら、1章でも述べたように、地域社会においてインフォーマルな集団が子どもたちの間で成立しにくい条件が今日の日本社会には存在している。これまでは地域社会におけるインフォーマルな集団が豊かにあったことが前提に園でのフォーマルな集団が成立していたと考えることができるのではないか。

そうだとすると幼稚園は小学校の前倒しをするだけでは問題の解決は難しいことは明らか

である。

今求められているのは園の外にインフォーマルな関係が希薄だからこそ、園のなかで保育者が意図的にインフォーマルな関係を育てることでフォーマルな集団を形成していく工夫が求められているといえよう。

第3章 インフォーマル集団の再構成とは

第2章でみてきたように園生活では朝の会までの短い時間のみがインフォーマルな活動になっているところが少なくない。園の一日のほとんどがそもそもフォーマルな集団での活動だとすると、インフォーマルな集団を再構成しフォーマルな集団を豊かにするという目的を果たすことは難しい。ましてや園の外でもインフォーマルな集団がないのだとしたら、今日的課題の第一は園のなかにインフォーマルな集団を豊かに作り出す援助なのではないだろうか。

まず考えられる工夫としてはインフォーマルな集団での活動を増やすということである。

A 保育園⁴では子どもが登園すると荷物を置き自由遊びが始まる。10 時頃になると片付けがはじまり保育室に入るが「朝の集まり」は意図的に行っていない。かつてはやっていたが「あの時間が子どもにとってどういう意味があるのか」と問い直した結果、廃止となっている。小さなことかもしれないが子どもにとって教育的効果が少ないと判断されたフォーマルな活動の縮小といえるだろう。A 保育園は外遊びが中心の保育を行っている。全部の子どもたちが一斉に園庭にでると豊かな活動を保障するのが難しいために、クラスによって、「きょうは〇〇クラスは裏山に散歩にいきます」「〇〇クラスは絵を描く活動を少ししてから園庭で遊びます」「〇〇クラスは先に園庭であそびます」と場所が重ならないように保育者が配慮しながらも、「〇〇クラスはここで××をして遊ぶ」などといった一斉活動を行うよりは、決められた場所で比較的自由に遊んで過ごす。そのため子どもたちは自ずとインフォーマルな集団での活動が多くなる。インフォーマルな活動は自由度が高いが故に、子ども同士の言い合いやケンカなども少なくない。そのため保育者はクラス集団を作るよりまえに、インフォーマルな関係のなかで発生する子どもたちのトラブルを一緒に解決することでまずはインフォーマルな集団をつくることに主眼がおかれるといえよう。

地域社会のなかにエピソード①にみられたような年齢が上で子ども集団のリーダーがいればその子がインフォーマル集団の成立のキーマンとなるのだが、これまでみてきたように現代社会の環境はそれを難しくさせている。だからこそ保育者により決めの細かい援助が必要になっているのである。

A 保育園では食事も係が配膳を行い全員そろってからの「いただきます」というシステムを廃止した。遊び終わった子どもから手洗いを済ませ、配膳盆をもって保育者が配膳盆によそった食事をのせていき、子どもたちはよそってもらった配膳盆を好きな席にもっていき、4人がけのテーブルの4人がそろったところから「いただきます」をするシステムにした。このシステムもクラス全員でというフォーマルな時間をインフォーマルな時間へ変革した事例をいえるだろう。

第4章 今後の「人とかかわり力」と保育

かつては集団教育のその見事さが世界に絶賛された日本の教育現場だが、それは裏返せば学校外のインフォーマルな集団での活動が豊かだったからこそ可能だったのではないだろうか。それを裏付けるかのように、インフォーマルな集団が成立しにくい現代の日本においては小1プログラムや学級崩壊等、集団教育が成立しないという問題がクローズアップされるようになった。

この問題に対して様々な研究や実践が行われている。幼小の接続の問題と捉え、両者の接続をスムーズにするための工夫やカリキュラム開発⁵も行われてきている。その一方で幼稚園保育園が小学校のカリキュラムや文化を前倒しして取り入れようとする実践も多く見られる。

これらのアプローチはいずれも幼稚園保育園と小学校の間にある様々な制度的断絶を何らかの方法で緩やかにしていこうという取り組みである。

しかし本論で述べて来たことからこの問題にアプローチするならば、菊池が提案しているようなインフォーマル集団の再構成という課題にチャレンジするアプローチも有効ではないだろうか。有効だけでなく、なによりも、インフォーマル集団の中にこそ子どもたちが主体的に「人とかかわる」機会があふれているといえよう。特に保育園幼稚園といった家族と離れて過ごす場は、日本社会の特徴である少子化、情報化、消費社会から一線をおいた場でもある。少子化で子ども同士のかかわりが少なくなっている現代だからこそ、ある一定数の子どもが集団で過ごす場としての園は子どもの育ちにとって貴重である。また園には家庭に比べればテレビやスマホなどの情報機器とは縁遠く、子どもたちが目にする機会もぐっとへり、その代わりに友だちや保育者との生身の関わりが存分に味わえる場所である。また園にある絵本やおもちゃは保育者が保育の専門家としての知見から選び、その園で代々、大事につかわれてきたものばかりである。アニメとのタイアップとは一線を引いたシンプルなおもちゃが多いのである。家庭では自分な好きなおもちゃを使い放題の子どもであっても、園のものはみんなのものということを覚え、共有して使うことの難しさを遊びの中で経験していくだろう。

そのように考えるとき現代社会だからこそ幼稚園や保育園というのは子どもの人とかかわり機会にとって貴重なそして重要な場であることが分かる。

ではインフォーマルな集団をどのようにフォーマルな集団に再構成していけばよいのだろうか。

園には園文化があり、子どもたちはその園の構成員として園文化に適應していく。それがスムーズにできたのがかつての日本の教育の特徴だったといえよう。しかし本論がのべてきたように今それが難しくなっている。だとしたら保育者や教師は子どもを単なる適應者と捉えるのではなく文化創造の主体者として捉えることが必要なのではないだろうか。文化はゼロからは生まれえない。そこには園が作り続けて来た園文化を子どもたちが外から持ち込む子ども文化が対立したり、ねじれたりしながら新しい園文化が生まれるというプロセスが存在する。現代の問題はこの子どもたちが持ち込む文化が一枚岩ではないということである。かつてならみんな同じテレビや話題を共有してできていた子ども集団が今は多様なメディアや価値のもとでそもそも子ども文化が成立していないという課題がある。

そうだとするならば園のなかでまずは子ども文化の成立を援助していく必要があるのかもしれない。

その成立過程を通して「人とかかわる」機会が園のなかで豊富になり、「人とかかわる力」の育ちにつながるのではないだろうか。

¹ 筆者の近所の子どもたちの様子である。小学校が学校から帰ってくると自然発生的にメンバーが集まり小学校 6 年生の女子を中心に集団遊びが頻繁にみられた。

² 2014 年の合計特殊出生率は 1.42 であり、2005 年以降ゆるやかに上昇していた出生率が再び低下している。

³ 清水玲子 鈴木佐喜子,2003, 今の子育てから保育を考える, 草土文化。

⁴ 静岡市の保育園。筆者が 2011 年秋から週に一度観察に行った際のデータである。

⁵ 横井紘子, 2007, 幼小連携における「接続期」の創造と展開, 御茶ノ水女子大学子ども発達教育センター紀要

引用文献

- 菊池恵映、2005、保育場面において遊びを捉える保育者のまなざしー“遊び集団を捉える”ことを困難にしているものは何か、日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第 31 巻。
- 内閣府 文部科学省 厚生労働省、2014、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- 結城恵、1998、幼稚園で子どもはどう育つか 集団教育のエスノグラフィ、有信堂